（1）日面道

釜崎の集落を過ぎ吉田集落に入る。日面道と呼ばれる道で、吉田川左岸にある。森脇さん前を通り、すぐに山手に道がある。田んぼのあぜ道を広くしたような道であったが、荷車を引いて通ることができたという。小学校跡の向かい側まで現在の道より高い所を通る。ここより吉田川沿いに学校屋敷（三貫納宅）と呼ばれているところまで行く。

阿弥陀堂から洞さん辺りまで現在とほぼ同じ道である。若田さん裏、常蓮寺前を通り、大窪さん前あたりで現在の道に出る。

この道が杉越峠に続く道になる、古地図では吉田上組の葡萄原さん辺りで吉田川を渡り日影道に入り姫塚前を通り杉越峠に向かう。

○白山神社の変遷

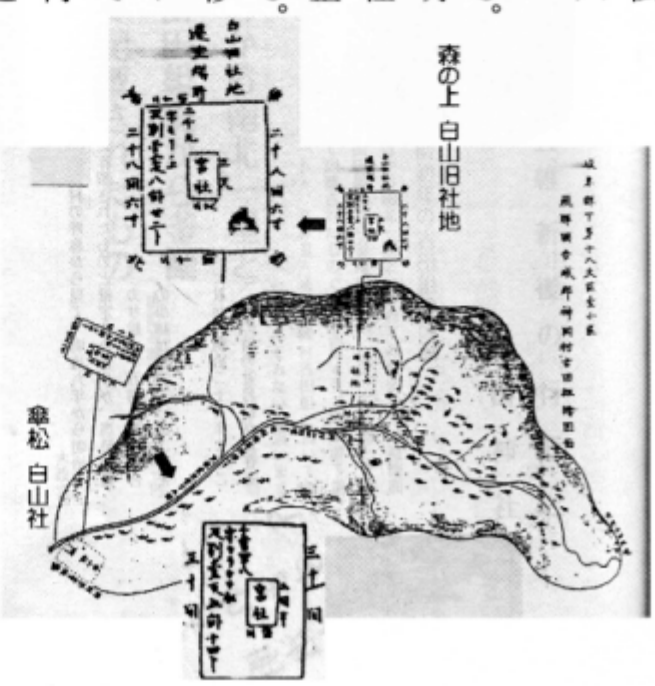
吉田区の氏神白山神社は、明治二十六年（一八九三）に現在の森の上に遷座された。それまでは傘松（吉田下の釜崎境）に氏神として安置されていた。

傘松に移される前は吉田上の宮林（杉越峠登り口付近）にあったと伝えられている。ここは美人で有名な八重菊、八重牡丹の姫塚のある近くである。姉妹が通ると草木もなびき、世の男たちは及ばぬ恋にもだえ苦しんだといわれている。

村ではこのことに困り果て神託を伺ったところ「村上に神を祀っているのでこのような事態になった。速やかに村下に社を移すべし」とのお告げがあったという。村では早速村下の釜崎境の傘松に神社を移したという。資料がなく伝説の域は出ないが一笑に付すことができないものがある。

吉田には言い伝えによれば昔は六社から七社があったといわれている。これらの神社は明治維新に一村一社が要請され統合整理されたのである。

傘松に神社が移されてどれくらい経ったかは不明であるが、「堂宇再建棟札」によると明和四年（一七六七）に幣殿が再建されている。棟札には白山大権現の文字も見られ神仏混合の平安仏教が色濃く息づいている。



明治九年八月から明治十二年二月の間に作製されたと考えられる組絵図には、釜崎境の千五百四十八番傘松に、間口三間、奥行二間半の社があり、社地反別一反五畝十四歩、白山社と記載されている。

そして吉田の中央には、二千九番字森の上に二尺に三尺の宮社、白山旧社地遷座場所と書いてある。このことは字傘松に産土神の白山神社があり、字森の上に別の白山神社

が祭られていたことを物語っている。さらにこの森の上の白山神社は、この吉田組絵図面の書かれる以前に傘松の白山神社に合祀されていることを示している。

傘松時代は阿弥陀堂がお旅所としての役割をしていた。前日に行列を整え、一泊されて翌日は還御となったことは広く知られている。

明治二十六年（一八九三）に元の森の上へ移されて後、平成五年には百周年を迎えた。その記念事業として社殿の屋根が銅板に葺き替えられ、境内の整備も進んだ。その後平成十年に上組の有志により手水舎の建設が発案され、翌年十一月に完成をみている。

こうして少しずつ整備されて一段と神々しさが深まった今の姿となっている。区民の信仰の場としてこれからも永く続くことを祈りたい。

参考『白山神社史』

○味噌蔵

吉田の釜崎境にある森本義一宅と森下浩司宅裏辺りにかって味噌を作っていた名残の釜がある。藪の中に底が破れた釜とそれを支えている一間角の石組みが見える。焚き口や柱跡もはっきりと見られる。そのそばには豆をひいたと思われる臼や味噌蔵の建物跡や廃材もあった。建物跡には味噌糀を並べて干した木製の折りも朽ちてはいたがまだたくさん残っていた。

戦時中、この近辺六軒（釜崎の方も含めて）が共同で味噌を作り保管場所としていたとのこと。作られた量ははっきりしていないが一抱え以上あるかます何個もあったということである。

味噌蔵跡

○吉田阿弥陀堂

阿弥陀堂は史料が乏しく詳細を知ることは困難だといわれてきた。

月日が流れて平成十二年に堂の修理が行われることになり、その際、故広洞敏雄氏等が区の代表にお願いして堂内の調査をすることになった。その結果、御本尊阿弥陀仏台座の墨書銘が発見されたのである。

阿弥陀仏
台座の墨書銘

その台座銘によると「嘉暦元年（一三二六）三月、京都より下りたまう尊像なり」とあり、さらに左下に宝永三年（一七〇六）に修復したことが記されていたという。

嘉暦元年というと願智坊、明智坊が本願寺覚如上人の命を受けて、飛騨布教のため高原郷吉田に本拠を定めてから